

第16回 ちゅうでん教育振興助成（平成28年度）

報告書資料 一般-75

学校名・団体名	門真市立北巣本小学校
HPアドレス	http://cms-p01.teacher.ne.jp/kitasu/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	児童の自己肯定感を高めるアクティブラーニング の展開
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>門真市教育研究指定校として「北巣本授業スタンダード」を定着・発展させるため貴助成金の活用による学習基盤整備を行うもの</p>	

1. 活動のねらい

本校では従来から「つかむ」「見通す」「考える」「学び合う」「振り返る」の五段階からなる「北巣本授業スタンダード」を定め、このスタンダードに沿った指導を全学年で実施し、併せて家庭学習の振興を目指した「家庭学習のすすめ」を配布することで自ら進んで学ぶ児童の育成に学校と家庭が連携して取り組んでいる。

今年度、上記スタンダードの内「学び合う」段階の中核である調べ学習を児童が一層能動的に進められるよう民生委員・児童委員および青少年指導員各位に図書館ボランティアとしてご協力いただけることとなった。

『「つながり格差」が学力格差を生む』(大阪大学 志水宏吉教授著作)とされる昨今、本校では児童の学力向上を軸に学校・家庭・地域の連携体制が整いつつある。

時を同じくしてアクティブラーニングの視点(主体的・対話的・深い学び)から上記スタンダードを全教科に展開し、道徳の教科化にも対応するよう市の教育研究校に指定され、市費司書の配置も新たに受けたことから、貴助成金を元に調べ学習の拠点である図書室を以下の項目に沿って整備した。

2. 活動の内容(細目のねらい)

- ① 図書室の明窓化…窓ガラスへの退色防止フィルム添付など明るくて開放的な図書室を実現
→図書室来訪機会の増加
- ② 貸出方法を変更
→合理的な配慮(ユニバーサルデザイン)の実現・貸出冊数の増加・自己肯定感の高まり
- ③ 図書へのブックコートフィルム装着
→蔵書回転率の上昇に耐える蔵書整備

3. 活動の実際

① について

これまで司書(教諭)による蔵書整理や、蔵書増加に対応した校務員作業による面展台・移動式書架の整備、拡充が行われていたが昨年十一月に上記の工事を実施し、カーテンなしの授業・図書室開放を展開できることとなった。この変化に児童はもちろんボランティア各位からも大変好評を博している。

② について

当初低学年、中学年、高学年と段階的に整備・移行する予定であったが、貸出方式が併存しては混乱するとの意見があり、全分野の蔵書配分に偏りが無いよう整備冊数を精選したうえで、整備総数が4000冊に達した二月から試行としてブラウン式貸出に移行した。

本方式は従来の図書カード記入方式(一種の読書ノート併用式)に比べて貸出・返却処理が容易となり、調べ学習を家庭で行う場合に求められる複数冊数の貸出機会が増加した。

また本のタイトルを十分に筆写できる段階ではない低学年児童や合理的配慮を求められる通級・支援学級対象児童にとっても貸出の利便性が高まったと考えられる。

③ について

従来から段階的に整備しているが、貴補助金により②の結果特に貸出しの多くなるであろう図書上位1割(600冊)分の整備が行われている。なお蔵書回転率は試行段階のためか3割強の増加となっている

これらの整備がどのように上記スタンダードの展開に寄与したのか確かめるべく、①②の実施前(十月末)・実施後(二月末)の二回に分けて四~六学年の児童に悉皆アンケートを行った。

4. 活動の成果

アンケートの質問内容は政策研究大学院大学教育政策プログラム在籍の石崎一水研究員が著されたレポート「言語活動の充実が学力に与える影響について」内で整理された27設問のうち「児童数」項目を除いた26設問を用いた。これらは前述の志水教授が「C学力」の検定指標としても触れられているものでもある。推移は概ね以下のおりである。(なお無答者や児童数の増減のため、ポイントの和は必ずしも零にならない)

各設問のうち、

○児童の学習状況を四択式で尋ねた21項目の推移を平均化すると六年生では積極的な回答が7ポイント、やや積極的な回答が-3ポイント、やや否定的な回答が-5ポイント、否定的な回答が1ポイント増減した。

同じく五年生では4、1、-6、-2ポイント増減し四年生では0、2、-2、0ポイントの増減であった。このように増減幅は学年を経るにつれプラスに大きく偏移している。

○その中で友達の前で自分の考えや意見を発表することは得意かどうか尋ねた項目ではそれぞれ六年生+11、-8、-2、3、五年生±0、6、-8、±0、四年生+3、-6、+3、±0ポイントとなっており、自己肯定感についても概ね高学年になるほどプラスに偏移する傾向がうかがえる。

また残る五項目のうちとりわけ図書室環境の整備について、

○図書室(公共図書館含む)への来室状況を尋ねる項目ではそれぞれ上位・中位・下位区分で六年生+8、-3、-6、五年生+20、-3、-19、四年生-9、-3、+6ポイントと六年生と五年生で頻度が高まっている傾向にあるが、四年生ではむしろやや頻度が低下している。

○平日の読書時間(上記「家庭学習のすすめ」でも奨励している)について尋ねた項目では石崎レポート内で統計的に学力に負の影響があるとされる「一時間以上」について(2つの設問項目の和で)六年生-1、五年生±0、四年生+6ポイントとなっている一方、不読率(10分未満の二つの設問項目の和)はそれぞれ六年生-6、五年生-11、四年生-15ポイントとなっており、最も学力向上に寄与すると推定される読書時間10分~30分の項目は六年生+11、五年生+6、四年生±0ポイントとなった。

5. 活動の概括

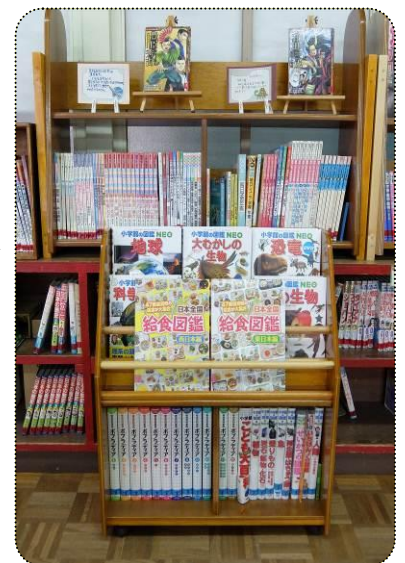
アンケート項目の前半21項目をみると図書室整備には児童から総じて妥当な評価が示されているものと推測できる。また後半5項目についても「学び合う」段階を主軸とする学校の授業展開・家庭での読書活動・地域からの読書支援によってもたらされた質量両面での読書時間充実をうかがわせる内容であった。

これらのことから今回の取組は上記スタンダードの全面的な展開(アクティブラーニングの活用)によってもたらされる、道徳の教科化にも対応した学力向上への端緒と概括できる。

以下の写真は図書室整備活動の一端である。



左：明窓化後の図書室
右：校務員作業による
面展台型書架(上)
移動式書架(下)



下：ブラウン式図書方式
で用いる貸出票管理箱

左下 ポップによるおすすめ図書紹介
(貸出済図書にはその旨表記あり)



右：整備前の調べ学習の様子
(図書の退色防止のため常時カーテンをかけており暗い)



このような学習環境の充実に助成いただいた貴団体に深く感謝申し上げます。